仮名遣い問題論評集

一　かなづかひ　の　こと

（明治十六年八月）

三宅米吉

仮名文字運動の団体「いろは　くわい」の機関誌『かな　の　まなび』第一号（明治十六年八月）に発表されたもので、生徒の学習成績を基に、一音を表す字は一字に限るようにすべきであること、仮名遣いはなるべく発音と文字とが違わないようにすべきであることを述べたもの。三宅米吉（一八六〇～一九二九）は歴史学者、考古学者で、「いろは　くわい」の有力な一員、仮名文字運動の諸団体が合体して「かな　の　くわい」を結成したときにも参画した。後に、東京高等師範学校長、帝室博物館総長、東京文理科大学長などを歴任した。

所収の本文は、『三宅米吉著述集』によった。

おのれ　としごろ　おもえる　わ、　しなもじ　を　か＝らず　して　も-つぱら　わが　くに　なる　かなもじ　のみにて　し-よもつ　てがみ　うけとり　なにくれ　と　なくもの　みな　かき　なん　にわ　その　べんり　なる　ことたとえん　に　もの　なかる　べし、　さる　にても　こ＝れまで　しきたり　の　かなづかい　に　したがい　なば　くち　にて　となうる　ところ　の　おん　と　ふで　して　かく　ところ　の　もじ　と　たごう　ところ　お-おく、　また　おなじ　ひとつ　の　おん　を　あらわす　もじ　の　ふたつ　も　みつ　も　ありて　その　くべつ　を　しること　いと　かたければ　かなぶん　とて　あながちに　たやすき　わざ　にわ　あらで　なを　くつ　を　へだてて　かゆき　を　かく　の　おもい　あり、　されば　いま　かなぶん　を　よ　に　ひろめん　と　する　にわ　まづ　その　かなづかい　を　あらためて　なるべく　やすく　する　こそ　たいせつ　なれ　と・

かくて　こぞ　の　なつ　いろはく-わい　の　おこりし　より　おのれ　も　その　なかまと　なり　ひとびと　と　あい　はかり　おもい　を　のべ　かんがえ　を　つくして　ついに　かな　の　つかいかた　ぶん　の　かきかた　など　ひとと-おり　つくりさだめぬ、そも　いろはく-わい　にて　さだめたる　かなづかい　の　よのつね　の　と　ことなる　ところ　わ　ひとつ　にわ　よのつね　の　にて　「を」「ゐ」「ゑ」　を　もちいる　を　すべて　「お」「い」「え」　に　かきあらたむる　こと、　ふたつ　には　「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」　の　もじ　を　もちいて　「わ」「い」「う」「え」「お」　の　おん　を　あらわす　を　あら＝ためて　ただちに　「わ」「い」「う」「え」「お」　の

もじ を もちいる こと、 みつ にわ かんじ の おん の つづりかた おなじ おん に して くさぐさ ある を ひとつ に さだめたる こと なり・（ぐ＝わしく わ いろはく-わい にて し-ゆ-つぱん したる ぶん の かきかた と いう そ-おし に のせたり・）

みぎ の ごとく あらたむれば かなづかい いと やすく なりて ほとんど くち にて となうる ところ の おん と ふで して かく ところ の もじ と おなじき を えて もの の しぜん に かなえる が ごとし、 さればにや おさな わらんべ が わずかに いろは 四七 もじ を おぼえて いたづらごとに ふみ かく まね する を みる に その かなづかい みな かく ぞ ある・

おのれ と-おき-よお しはんが-つこ-お に ありて こ＝どもら が よみほん の しけん の とき かき い＝だせる こたえがき に かなちがい の お-おき を みて うつし おけり・ その かなちがい の お-おき わ おしえかた の ゆきとどかざる にも すこし わ よる なる べけれど、 まことわ よのつね の かな＝づかい の むつかしく まぎらわしき が ゆえ と おもわる・

いま ここに しめす わ しはんが-つこ-お ふぞく し-よ-おがく の しも の ごき-ゆ-う の せいと が よみかた の しけん に こたえたる もの なり、 もんだい わ 老人 苦労 毎朝 成長 牛馬 にて い＝ちいち おん と よみ と を かな にて しるさせ＝たる なり、 も-つとも これら わ みな かつて ま＝なびたる もの なれば いづれも その おん をも よみ をも しれる なり、 しかるに その かなづかい の いろいろ なる こと つぎ の ごとし・ せいと の な わ ここに よ-お なければ はぶきぬ・

老人	苦労	毎朝	成長	牛馬	せいとのな
ロウジン トシヨリ	クロウ ホネヲリ	マイチヨウ マイアサ	セイチヨウ ソダツ	ギウバ ウシムマ	い
ロウジン トシヲトツタシト		マイチヨ マイアサ	セイチヨ ヲキイ	ギユバ ウシウマ	ろ
ロジン トシヨリ		マイジアウ マイアサ	セヘジアウ ヲヲキクナル	ギウバ ウシウマ	は
リヨジン トシヨリ		マイテウ マイ日	セイチヨ ヲヲキクナリ		に
ロヲジン トシヨリ	クロウ	マイチヲ サイアサ	セイチヨ ヲヲキクナル	ギウバ ウシンマ	ほ
ロヲジン トシヨリ	クロウ クルシミ	マエツヨ マエアサ	セーチヨ ソダチコト	ギヨウバ ウシンマ	へ
ロヲジン トシヨリ	クロウ ホネヲリ	マイチヨ マイアサ	セエチヨ ソダツ	ギヲバ ウシヤンマ	と
ロウジン トシトタヒト		マイテウ	セーテウ ヲウキクナル	ギウバ ウシヤウンマ	ち
ロジン トシヨリ			セーチ オキク	ギバ ウシウマ	り

この こたえがき を こまかに しらぶれば おもし＝ろき こと おーおかり、老人 の かなづかい の よ＝のつね なる わ「らうじん」なる に、さ かける わ ひとり も ある こと なし、(は)と(り)と の ながおん を わきまえざる と(に)と を のぞけば「ろう」と「ろを」と の ふたつ の つづりかた に わかるる なり、また 苦労 の かなづかい も「くらう」なる に、これ も また さ かける わ ひとり も あらで「ろう」と「ろを」の ふた いろ に つづれり、また 毎朝 わ「まいてう」なる に、さ かける わ(に)(ち)の ふたり にて その ほか わ みな たがえり、ことに まがりおん なれば その まちがい はなはだし、「ちを」「つよ」「じあう」の ごとき わ その こどもら が くふーう おもいやられて おもしろし、また 成長 わ「せい＝ちやう」なる に、さ かける わ ひとり も あ＝らず して、長 を「ちよ」と つづれる も一つとも おーおく、「てう」と かける ひとり あり、これ わ かみ の 朝 と おなじう こころえたる が ご＝とし、また 成 を「せー」と かける もの み＝たり、「せえ」と かける ひとり、「せへ」(「へ」と「え」と の くべつ を わきまえず・) と か＝ける ひとり、あわせて いつたり、「せい」と かける より ひとかず おーおし、また その よみ の「ををきく」と かける も おもしろし・(すべて「を」と「お」と の くべつ を しらず つねに てに＝をは の「を」に なれたる ゆえ いつも「お」の おん にも「を」の もじ を もちいる なり・)また 牛馬 の おん ただしく かける もの よたり、「ぎゆ」と かける もの ひとり、「ぎゆ」と かける もの ひとり、「ぎを」「ぎよう」と かける わ いづれも なまり ことば にて ただしき おん を わきまえざる なる べし、また その よみ を た＝だしく かける わ(い)ひとり にて、あと わ「うま」と かける みたり、「んま」と かける も また みたり、「うんま」と かける ひとり、いづれも おもしろし、げに「むま」と かく わ ずいぶん むり にて「んま」また わ「うま」と かく こそ しぜん なる べけれ・

また つぎ なる わ おなじ が一つこーお の かみ の ごきーゆーう の せいと が かんぶん の よみかた の しけん に かな もて その よみかた を しるしたる うち より かなちがい の ある を とりあつめたる もの なり、こ も また な を のせず、いろは

もて　これ　に　かゆ、

思、(オモー)　栄達、(エータツ)　争、(アラソー)　率、(ヒキヒ)　代、(コール)　閉、(トジテ)　(い)

帰、(カエリ)　乗虚、(キョニジョヲジテ)　請、(コヲ)　(ろ)

中大兄皇子、(ナカノヲーエ)　凍餒、(トヲタイ)　代、(カエテ)　吟唎、(リコヲ)　返、(カイス)　(は)

兄梯、(ヘウケシ)（編者注、古事記に見える人名兄猾のことか。）　(に)

蔑、(コヲ)　中大兄、(ヲーエ)　請、(コヲ)　帰、(カヒリ)　(ほ)

驕暴、(キョウボウ)　悪、(ハルキ)　中大兄、(ナカノヲウエ)　憂、(ユリヨウ)　(へ)

定、(テエ)　統、(トヲ)　幽、(エウ)　(と)

みぎ　こまかに　しらぶれば　また　おかしき　こと

おーおかり、なか　に　ついて　(に)　の　「へうけし」　(へ)

の　「はるき」　わ　ことに　はなはだしき　まちがい

ながら、　ういまなび　の　もの　にわ　しばしば　ある

こと　にて　はひふへほ　の　おん　の　ひとつ　ならざる

が　ため　なり・　さて　この　ごきーゆーう　の　せいと　わ

よほど　よみかた　も　すすみたる　なる　に　なにゆえ

かく　かなちがい　の　おーおき　か　と　いう　に、　す＝

べて　しけん　わ　とき　に　かぎり　ありて　その　あ＝

いだ　に　いくばく　の　こたえがき　を　つくらねばな＝

らぬ　が　ゆえ　せいと　の　こころ　はなはだ　せきた＝

ちて　かなづかい　など　にわ　すこしも　こころ　を

もちいず　ふで　に　まかせて　かく　が　ゆえ　に　お＝

のづから　かく　かなちがい　を　なす　なり、　ただし

これら　わ　かなちがい　と　わ　いいながら　よのつね

の　と　たがう　のみ　にて　まーつたく　よめず　と　いう

に　あらねば　あながち　に　これ　を　あやまり　と

すべからず、　かえりて　かなづかい　の　もーつとも　や＝

すき　もの　しぜん　なる　もの　と　こそ　いう　べけれ・

これら　の　しらべ　に　よりて　よのつね　の　かな＝

づかい　の　むつかしき　こと　および　これ　を　あら＝

たむ　べき　こと　また　これ　を　あらたむる　にわ

つぎ　の　ふたつ　の　こと　の　たいせつ　なる　を

しる・　すなわち　ひとつ　にわ　ひとつ　の　おん　を

あらわす　もじ　わ　いちじ　に　かぎる　べき　こと、

ふたつ　にわ　かなづかい　わ　なるべく　おん　と　もじ

と　たがわざる　よーお　すべき　こと、　この　ふたつ

なり・　いろはくーわい　にて　さだめたる　かなづかい　わ

これら　の　むね　に　かないて　いと　よし、　かなぶん

に　こころ　ある　もの　わ　かならず　ついて　みる

べし・